



TITLE:

日英米の海軍協定

AUTHOR(S):

小島, 昌太郎

CITATION:

小島, 昌太郎. 日英米の海軍協定. 經濟論叢 1921, 13(3): 449-450

ISSUE DATE:

1921-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127815>

RIGHT:

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第三十卷 第三號

大正十年九月一日發行

論叢

給付能力原則の適用

法學博士 神戸 正雄

農業勞働問題

法學博士 河田 嗣郎

中世都市の發達

文學博士 三浦 周行

時論

我國の地方税を論ず

法學博士 小川郷太郎

說苑

八時間勞働制の沿革

法學博士 山本美越乃

小學教育費の研究

經濟學士 小山田小七

井リヤム・タムスンの分配論

經濟學士 堀 經夫

雜錄

住居統計概説

法學博士 財部 靜治

伯林に於ける乳兒死亡率

法學士 汐見 三郎

戰後英吉利の經濟狀態

法學士 小島昌太郎

日英米の海軍協定

法學士 小島昌太郎

日英米の海軍協定^{***}

小島昌太郎

今日、海上強國としては世界に只三ヶ國あるだけだ。英、米、日、即ち是れ。此等三強國が各自の利害關係を、穩和なる交渉によりて處理し、相互の間に於ける平和關係を維持し得べき政策を確立するならば、世界に對して海上の平和を命令することが出来る。海上には國境標もなく、

雜錄 日英米の海軍協定

税關もなく、番兵線もない。數世紀の間、英吉利は最強海軍國として、公海の公安を維持して居つた。將來は、英米日の三國が、相互競争すること無く、相共に海上警察の任に當るが爲めに聯合しなくてはならぬ。世界が戦争を——長距離に亘る海上封鎖を——免れんとするには。

最近に至り、英米日の三國間に海軍協定を成立せしむるは、必ずしも外交上至難の業に非ざるの徴候が見はれて來た。今日、三強國間に限り無き海軍競争をなすは、世界の經濟狀態より見て、その中の二國を破産せしめ、一國を不具者たらしむること明かとなつて來たから、三國は縱ひ固定的條約を締結するに至ら破とも、兎も角、何等かの協定を結ばんとする態度をとるに至つた。海軍協定は、三強國の最小必要限度を基礎として之を定むるが甚だ便利である。併し三強國間に年々海軍豫算を協定するが如きことは、實行し得べき所ではない。最も實行し易き方法は、主力艦の艦型及び數に就いて協定することである。主力艦は海軍經費の大部分を喰ふ

ものであり、且つ他の艦船は之を標準とし、之に附隨して定めらるゝものだからである。

常識より考へても、海上の平和を得るが爲めに、三國が各々國民的勇氣を犠牲とせねばならぬのは、經濟上の必要より出づることが分る。

英吉利は最早二國標準主義を捨てた。米國と競争せんとする様な馬鹿な野心を持つて居ない。

故に英米間の協定は、日米間の協定よりも成功し易い。勿論日本も、今日にては海軍競争の制限に就いて考慮を拂ふ様になつて居るが、極東に於ける日本の野心が、米國の強き反對を惹き起したのが面倒だ。米國は支那に於ける門戶開放主義を固く維持し、日本が一部閉鎖したる門戶をも更に開放せしめんことを主張して居る。

又米國は比律賓との海底電信が、日本の支配に屬することに強き反對を主張して居る。日本の支配して居るヤップ電信島は、岩礁の破片の如きものであるから、米國の態度は詰まらぬことで騒ぎ立てる様に見えるかも知れぬが、此の岩礁の破片と雖も大戰の原因とならぬとは限ら

ぬ。日本も電線管理及び支那開放に就いて、永く米國に反對することは出来まい。英吉利は、米國に對しては日本を助けたいことは明かであるから、米國と協定するは日本の大なる利益である。日本の國富は米國とは比較にならぬ。日本の海軍は今日甚だ強力ではあるが長期の封鎖疲弊戦には堪へ得ない。日本があらゆる努力を盡して一隻建造する間に、米國は三隻を建造し得る。故に日本は孤立して米國と海軍競争をするよりは、英米と協定を結ぶがその利益だ。自己の利益を用意深く注意すると云ふことは、高尚な國民精神でないかも知れないが、併し國際間の事情に順應し得ると云ふことも亦立派な事だ。戰時感情の激したる際には、經濟上の利害などは眼中にない。併し戦争が済むで再び平和が來らば、收税吏が大きな手を擡げて戸外に來るのが始終目先に付くであらう。今や海上三強國の經濟上政治上の利益が、彼等を海軍協定へ推し進めつゝある。有爲の政事家にとりては、外交上正にその大手腕を振ふべきの秋だ。